

『偶然』

作者 淺羽一

次に殺すのはいよいよ自分だ。その筋では世界的に有名な殺し屋であるK氏はある日、たまった依頼が一段落したことを知り、そう決意した。三時間後には新しい依頼が無い込んできたが、その際に初めてそれまで来る物拒まずで受けていた依頼を断り、自分はもう殺し屋を辞めると宣言した。

途端にK氏の引退宣言は業界全体へ広まり、彼の確実な仕事ぶりに頼りきりだった裏社会の人間達は少なからず焦り、またその決意を疑った。K氏はもしかして別の組織に専属として雇われたのではないか。だとすれば彼が自分達を狙う前に一刻も早く殺さなければ。そして彼らはこぞってK氏の下へ使いを送った。どれも腕利きの殺し屋ばかりだった。

結果として、間の悪いことに敵対する組織から依頼された人間同士が一堂に介し、K氏の知らない所で偶然にも彼を狙う為には先に他の殺し屋を排除しなければならぬという状況が生まれた。生き残った人間は皆無だった。裏社会の人間達は改めて恐怖し、また惜しんだ。同時にK氏の引退が真実であれば互いに邪魔をしないでいようと不倶戴天の相手とさえ協定を結び、速やかに自分達が彼を狙った事実を隠蔽した。

矛盾するようだがK氏にはこれまで人を殺した経験が無かった。正確には誰かを殺す為に直接手を下した経験が無かった。銃を撃つたりナイフで刺したり、それどころかいつそ人を殴ったことすらもなかった。必要なことから。彼にとって唯一の武器は「偶然」だった。

例えば、彼にとある人物を殺してくれと依頼が来たとする。その相手は某製薬会社に所属する研究者で、普段は車での通勤ながら月に四日だけ、他府県にある別の研究所へ通う為に電車を使っていた。そこでK氏はその研究者が電車に乗る同じ時間に駅を訪れ、雑多な人が溢れるプラットホームで地面に向かってガムを吐いた。K氏がしたことはそれだけだった。

数秒後、急ぎ足で歩いてきた男が、ふと地面に落ちている真新しいガムに気付いて反射的にそれを飛び越えた。だが、急な動きでバランスを崩し、彼は慌てて体を支えようと思わず適当に手を伸ばした。不幸にもそれは見知らぬ女性の肩を掴み、転倒こそ免れたものの直後に女性が「痴漢よ！」と大声を上げた。すぐに男は無実を訴えたが、興奮した女性はまだで聞く耳を持たず、それどころか持っていたバッグを振りかぶって彼に殴りかかるうとした。しかし、思いの外その勢いが強すぎたのか、そこで彼女の手はバッグを放してしまい、それは男に向かってでなく彼女の斜め後ろへと飛んでいった。そして、不幸にもその先には間もなく到着する電車に乗ろうと線路へ歩き出していたターゲットの背中があった。

結論を言えば、思いがけない方向から飛んできたバッグに背中を押された研究者は、おそらく何が起こったのかも理解せぬまま線路へと落ち、やがて逃げる間もなく駅へ進入してきた列車に轢殺された。駅構内に悲鳴が満ちた頃、K氏は既に改札口から駅の外へと歩き出していった。

K氏の“殺し”はすべからずこんな風にして成されていた。

K氏にとって初めての殺人は、彼がまだその力を自覚していなかった9歳の頃の出来事だった。

彼に悪気はなかった。ただ、ちょっとした悪戯心で、学校の廊下を歩いていた級友の背中を「わっ」と言って軽く押したのだ。そうしたら級友は驚いて両手で抱えていた水一杯

の花瓶を放り投げ、それがやはりたまたま開いていた窓の枠に当たり、花瓶は窓から落ちなかったもののそこに入っていた水が滴となって外へ飛んだ。すると滴は直後にその下にある階段を歩いていた男性教師の頭に落ちて、彼が不意の感触に雨かなと空を仰いだ瞬間、彼は偶然にも足下の段差に躓き、さらに背中を仰け反らせていたせいでそのまま階段を落下して固い地面に後頭部を打ち付けた。

K氏を含め、突然の出来事に騒然となる廊下でその教師の事故に気付いた生徒は一人としていなかった。その結果、やがて他の教師に発見された男性教師は既に手遅れの状態になっていて、病院へ運ばれたものの夜を待たずに死亡した。日頃から生徒に不人気で、いっさいなくなつて欲しいと陰口をたたかれていた教師だったが、それでも見知った顔が突然に亡くなると言う出来事は学校全体に衝撃を与えた。特に、その日も「あんな奴、死んじまえ」なんて会話を交わす級友らに混じつて笑っていた当時のK氏はショックを受けた。

言うまでもなく、幼かったK氏が事の真相を理解していたわけではなかった。むしろ彼と同様の罪悪感を抱いた生徒はおそらく他にも複数いた。だから、彼がようやく本当の意味でそれが自分にとって最初の殺人だったと気付いたのは、それから数年後、やはり同様に「あんな奴、死んだ方が皆の為だ」と嫌われている人間が偶然の連鎖によって5回目の死を遂げた時だった。そして彼は、さらに数度の検証を経て、やがて遂に自らが生まれついでての殺人者であると自覚した。

K氏にとって、殺人をする上で重要なルールが一つあった。それは、自らの命を奪いに来たような相手への正当防衛を除き、殺す相手を決して己の都合によって選ばないということだった。彼にとって、死ぬべきは例外なく他者から死ぬべきと望まれている人間のみであるべきだった。

自分が殺したい相手を殺すのではなく、自分はただ他者の願望に巻き込まれているだけ。何時でも何処でも不幸の連鎖の起点となれる能力を持ったK氏にとって、けれどそもそも発端は自らでなく他者の意志だと言う言い訳は、とても重要な免罪符だった。言い換えれば、彼自身はむしろ自分のことさえも被害者の一人だと考えていた。

だから、K氏の下へ、かつて彼が殺した相手の身内が復讐に訪れた時、彼は少なからずショックを受けた。一月前のことだった。

まさか依頼者が喋つたはずもなかるうに、どうやって調べたのか、証拠も存在しないK氏の殺しを彼の仕業だと突き止めた女は、或いはそうだったからこそ彼の仕業だと確信したのかも知れないが、夜道を歩いていた彼の前にふらりと現れるやいなや「この、人殺し」と彼を罵つた。そして戸惑うK氏に女は二年前に死んだ男の名を告げた後、「あんたのせいで私達は不幸になった」と叫んだ。

K氏は答えた。しらを切ることも出来たが、それは少し薄情だと思つて事情を説明することにした。彼はとても律儀な性格だった。

「残念ながら、あなたのご主人は死ぬべき人だったんです」

女は激怒した。薄暗い外灯に浮かび上がる表情は般若のようだった。K氏は構わず続けた。「だって現にそうあるべきだと思われていた」。

女は怒鳴つた。「どうしてあの人死ななくちゃいけないのよ。あの人一体何をしたいって言うのよ」と。

K氏は答えなかった。何故なら知らなかったからだ。彼はいつも依頼対象の人物がどう

して「死ぬべき」と願われているのか、その事実以上の理由を聞かなかった。

「この人殺し」

女はK氏をなじった。彼は無言で聞いていた。

「あんたがいなければ彼は死ななかつたのに」

内心それはどうかかなと思つたものの、やはり彼は反論しなかつた。

「お願いだから彼を返してよ。それが出来ないなら、お願いだからいつそ私も殺してよ」彼は表情筋をぴくりともさせずに泣き崩れる女を眺めながら、とても素直に思つていた。果たしてこれは「依頼」なのかどうなのか。そうだとすれば一体どちらこそが彼女にとって本当に叶えたい願いなのか。

正解はきつと簡単だつた。でも、それは残念ながらK氏の力では実現不可能だつた。

他に人の気配もない暗い夜道の真ん中で、女は一人、土下座するように地に伏していた。

K氏は単純にその姿を哀れに感じた。だから、それはおそらく自分の役割でないと知りつつも、せめてもの罪滅ぼしにと彼女を慰めてやろうとした。同時にそれが彼女の望みへ応えることに繋がるという確信もあつた。

彼はそつと、小刻みに震える女の肩に手を置いた。その瞬間、彼女が顔を上げた。K氏を睨み付けるその眼差しは、怒つていると言うよりもまるで悔しがっている風に見えた。そして彼女は彼の手を激しく払いのけると、「死んじまえ」と怨嗟の声を残して走り去つていった。彼はそれを見送つた。自分自身がこんなにも直接に誰かから死を望まれた経験は無かつたな、と改めて彼が気付いたのは彼女の背中が闇に溶けてからだつた。

しばらく彼は動かずにいた。その耳に宵闇をつんざくようなタイヤの悲鳴と激しい金属の衝突音が届いてきたのは、それから間もなくのことだつた。やがて彼がスキル音のした方向へ歩いて行くと、交差点には既に野次馬の囲みが出来ていて、その向こうでは折れた電柱に突き刺さつたワゴン車と、それから一目で分かるほどむごたらしく死んでいる先ほどの女の体らしきものがあつた。周囲の野次馬が口々に話し、或いは携帯電話のカメラでその惨状を撮影する中、彼は静かにきびすを返した。

気の毒に、彼は心からそう思つた。手にはうっすらと痛みが残つていた。遠くから近付いてくる救急車のサイレンに混じつて、彼の耳に女が最後に遺した「死んじまえ」が聞こえていた。

彼はそれを依頼として受け取つた。

どうやら自分もまた死ぬべき人間であつたのだと、そう考えるとやはり人並みには悲しかつた。だからせめて現時点で残つている依頼が全て完了するまでは嫌なことを考えずにいようと決めた。そして遂にその時になれば潔く散ろうと考えた。

少なくとも、その時点では確かにそうだつた。

果たして、K氏はいざ自分で自分を殺すという段になって、恐怖した。当然だろう、誰だつて自殺なんかしたくない。

殺すことには、他人の死に関わることには慣れていた。でも、自分を殺したことはなかつた。だから、彼にはどうすれば良いのか分からなかつた。

とりあえず、痛くて苦しい死に方は嫌だと思つた。

K氏には銃を撃つた経験もナイフで刺した経験も、人を殴つた経験さえもない。なので銃やナイフを使うことは止めにした。

K氏が望めば裏稼業の人間はすぐにでもそれらを用意してくれただろう。或いは一錠で楽に死ぬる薬なんてのもあったかも知れない。首吊りに最適な太いロープもあるに違いない。でも、彼にはまるで実感が湧かなかった。どうしてもそれで本当に楽に死ぬるとは信じられなかった。理由は分かっていた。彼にとって見慣れた死に方は、もつと日常的で、もつと滑稽なものだった。

結局、K氏は少し大きめの駅を死に場所を選択した。高層ビルからの飛び降りも考えたが、随分と前に依頼を受けた際、対象者がビルから飛び降り自殺をした人間の下敷きになったことを思い出した。結果的に、飛び降り自殺を試みた人間は大けがをしつつも生き残り、依頼者だけが死んだのだ。全くもつて不幸な偶然だった。

様々な人が行き交うプラットホームの片隅で、K氏は何本も電車を見送った。駅員がたまに怪訝そうな視線を彼に送っていたけれど、話し掛けることはしなかった。

K氏はふと、自分が泣いていると知った。鏡がないのでどんな表情を浮かべているのかまでは分からなかったが、頬を伝う涙の感触と、鼻の奥を風船が塞いでいるような感覚が、彼に己の様子を教えてくれた。

K氏はその場にうずくまり、膝を抱えて背中を丸めた。しかし、一分もせぬ内に再び立ち上がった。

開き直ったわけではなかった。あまりの恐怖に感情が麻痺したわけでもなかった。ただ、万が一にも、そんな彼の姿に気付いた心優しい人がいたとして、どうしましたかと声を掛けてくれたとして、しかしそれが起点となって不幸の連鎖が始まるかも知れないと考えたからだ。それはあまりにも酷い話だと思った。

K氏の耳に、間もなく通過電車がやって来るというアナウンスが届いた。彼は震える足がそれでもまだ地面を踏んでいると確認するように足踏みをしてから、やがて線路に向かって歩き出した。

人と人の隙間を縫うように進んだ。端から見れば無理矢理に人混みをかき分けて、いつそ電車を待つ人の列に横から割り込もうとしている不届き者のようでもあった。

誰かが抗議するようにK氏の肩を押したのは、もしくは偶然そんな風にぶつかったのは、きつとそんな迷惑行為が原因だった。

決して乱暴と言えるほどに強い力ではなかった。でも、ただでさえ両足が今にも崩れそうだったK氏にとって、それは彼のバランスを崩すのに十分なきっかけだった。しかも間の悪いことに、彼の足下には盲人用の黄色い凹凸があった。線路はもう目の前だった。

彼は躓いた。そして前のめりへ倒れた。必然的に、彼は線路へ落ちていく。彼を含め、そこにいた誰もがそれを受け入れた、かに思われた。

あつ、と言う声と同時に、K氏の体を支える力が生まれた。

善意では無いのかも知れない。単なる反射なのかも知れない。いや、いつそ理不尽に巻き込まれただけかも知れない。しかしいずれにせよ、K氏の体はすぐ隣にいた若者の腕によつて線路とは反対方向に押し戻された。

K氏は尻餅をついた。彼の目には、驚いたような、安心したような、どちらとも判然としない若者の顔がまるでコマ送りをされたビデオのごとく映っていた。そして彼の眼前で、その若者は線路の下へと落ちていった。

「人が落ちたぞ！」

誰かがそう叫び、周囲はにわかに騒然となった。

K氏は突然の事態に混乱して上手く立ち上がれなかった。「おい、大丈夫か」と彼の頭上から声が降っていた。

K氏は四つん這いの格好で線路を覗き込んだ。たった今、彼を救った若者は赤茶けたレールを枕にして眠っているみたいにびくりともしていなかった。

打ち所が悪かったのかも知れない。K氏はすぐにそう思った。それはとても自然なことにさえ感じられた。だとすればきつとじきに列車もやって来るに違いなかった。駅員が気付けて何らかの行動を取るも、残念ながら間に合わず、そうしてその若者はK氏の身代わりとなって死ぬ。

自覚した時にはもう既に、K氏は線路へ飛び降りていた。

K氏は若者を抱え上げようとした。しかしびくともしなかった。当然だ、彼はお世辞にも腕力のある人間ではない。

切迫した声が響いていた。逃げろ、と言っていた。しかしK氏の耳には入っていないかった。彼は最早、何かを考える余裕すらなく、ただひたすら若者の体を持ち上げようとしていた。

ふっと、その体が持ち上がったのは、その直後だった。だけどそれは決して火事場の馬鹿力的な奇跡ではなかった。K氏の他に男性が二人、線路へ飛び降りて一緒に若者の体を担ぎ上げていた。そしてさらに、プラットフォームにいた何人もが若者だけでなくK氏も含めた全員の体を掴み、思い切り引っ張り上げた。

けたたましい金属音を響かせて、彼らのいた場所からおよそ数メートル通過した辺りで電車が停止したのは、数瞬後のことだった。

歓声が起こった。その中心には、若者と、それからK氏がいた。

誰かがK氏の背中を叩いた。続け様に二度、三度、彼は体のあちこちを叩かれた。「あんたすげーな」と賞賛の声も上がった。「もつと後先考えろよ」と怒鳴っている声もあった。「大丈夫か」と気絶した若者を心配する声も多かった。

K氏は呆然としていた。だが、徐々に己の行動を理解するにつれ、さつきまでとはまるで別種の震えに全身を襲われた。彼は改めて今は停止した車両を見た。電車がこれほどまでに大きく感じられたのは、生まれて初めての経験だった。

駅員が担架を持ってきて若者を運んだのは、それからすぐのことだった。駅員はさらにK氏にも「歩けますか」と聞いてきた。彼らはK氏のことを純粹に案じてくれている様子だった。まさか彼がそもそもその発端だなんて考えている気配は皆無だった。

K氏は立ち上がった。少しよろけたものの、自分の足だけで立ち上がった。再び歓声が上がった。ふつふつと、彼の中で不思議な感情が湧いてきた。

初めてだと、K氏は思った。彼は殺さなかった。それどころか彼は人の命を救った。何より彼は自らの手で―他の人の手を借りたとしても―偶然の連鎖を断ち切った。何もかも初めてだった。

一言で表せば、それは達成感に近かった。だけど決して同じではなかった。そして同時にとてつもない後悔が生まれた。やれば出来るじゃないかと言う実感は、やっていけば出来たかも知れないのと言う想いの裏返しでもった。

K氏は駅員らに大丈夫ですと声を返した。それから事情を伺いたいと言う彼らに自分は

たまたま偶然に近くにいただけですと答えた。詳細を話せばややこしくなる、そう悟った彼はさっさとその場から離れようと思った。すぐ近くでは彼と一緒に線路へ下りた二人の男性も同じく話を聞かれていた。だから後は任せれば良いと思った。足の震えはもう止まっていた。

K氏は駅員らの隙を見て、駆け出した。ちよつと待って、と言う風な声が背後から聞こえたけれど、彼は構わずプラットホームを走った。視線の先に改札へと続く階段が見えていた。

K氏は思った。死ぬのはもう少し先にしよう、と。なるほど確かに自分は死ぬべき人間なのかも知れないが、同時にその前に出来ることやすべきことも沢山あるはずだと。

K氏は走った。足はもしかすると人生で一番なほどに軽かった。だとすれば駅員が彼に追い付けるわけもなかった。そして彼は勢いよく階段を駆け下りた。

どん、と彼は何かに背中を押された。危ない、そう思った時にはもう既に、彼の体は階段を離れて宙に浮いていた。

上下左右の区別を失った彼の視界の端に、口を大きく開けた白いトートバッグが映った。持ち主は見当たらなかったものの、きつと女物だった。メモ帳やペンと言った中身が容赦なく空中に吐き出されていた。気の毒に、と彼は不思議とそんなことを思った。

彼は落下した、真っ逆さまに。幸か不幸かその先には誰もいなかった。音もなく近付いてくる硬そうな地面のタイルを見つめながら、彼はそれを良かったと思った。

何もかもが消える寸前、K氏はどうかせめて当たり所が“良くなる”ようにと生まれて初めて偶然を願った。